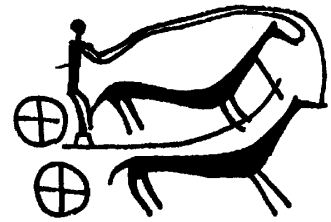


# センターニュース

Hokkaido University  
Center for Research and Development in Higher Education

北海道大学高等教育機能開発総合センター

Newsletter No. 45



## 討論：成績評価をめぐって（その2）

（3-5ページ）

高校と大学の接続に関する日米シンポジウム（6ページ）

2003（平成15）年度全学教育部行事予定表（7ページ）

2月に「インターンシップセミナー2003」（9ページ）

（詳しい目次は裏表紙にあります）

## 巻頭言 FOREWORD

# 教育戦略の推進について

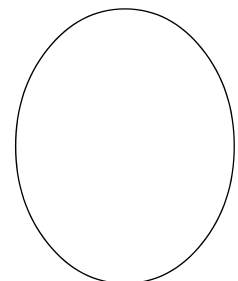
副学長・高等教育機能開発総合センター長 徳永 正

### 1. 入学者選抜制度と学士課程教育

2001年度に本学の全研究科は大学院重点化され、本学は研究重点大学としての長期教育目標を設定しました。この目標実現のためには、学問に対して意欲ある学生を集めることと、この目標を見据えた教育システムを構築することが重要な課題となります。2000年度に提出された「未来戦略検討WG」教育研究部会（教育検討作業部会）の答申は、この長期目標と大学では2006年問題と言われる中等教育以下の「学力低下」に対する対策を踏まえています。その基本的な考え方は、「学士課程教育では、総合的な

基礎教育を重視し、併せて学生が自らの意思に従って、段階的にその専門を選択できる自由な教育システムを構築すべきである。そのためには、従来の学部教育科目の共通化を段階的に進め、全学的な合意を前提

に、全学的なレベルでの統合された学士課程の創設を構想し、また、学士課程教育と大学院教育の新しい形の接合を図るべきである。」（『新世紀における北海道大学像』2003年3月、p.2）です。



国立大学の法人化により、各大学は今後どのような大学を目指すのかに関する中期目標・計画の原案を2003年6月中にまとめることが要請されています。本学には上述の答申案があります。2001年度の教務委員会に設置された教育組織及び教育課程の在り方WGでは、この答申案にある“全学的な合意”を前提にした“学士課程創設”の議論には進めませんでした。他方、2002年度の入学者選抜制度調査委員会が行った調査では、理系の多くの学部が現在の学部・系単位の選抜法を変更したいという考えを持っていることが判りました。初年度教育をどのような形で行うかは、教育に関する本学の中期目標・中期計画の最も基本的な課題です。

## 2. 教育戦略推進WGの設置

入学者選抜制度と入学後の教育組織の問題は密接に関連しており、全学的合意を必要とするので、教務委員会で議論すべき課題です。この他にも全学的な学部・大学院教育に関する中期目標・計画の作成が求められています。教務委員会は部局長を含めた形で構成されていますので、これらの重要問題を審議すべき機関です。これらの重要問題についての調査を行い、具体案を答申する「教育戦略推進WG」を設置することが11月28日の教務委員会で認められました。これまで本学では、学部教育の目標・計画は各学部に任されており、全学での議論は全学教育に関するものに限られていました。このWGでは学部・研究科を代表した議論ではなく、全学的な立場からの教育に関する審議を求めたいと思います。法人化後は、問題が起きた際に立ち上げるWGの形ではなくて、教育戦略推進室の形で常置しておく必要があります。この設置に関しても議論する予定です。

## 3. 当面の検討課題

中期目標及び計画として要請される項目が明らかになりました。これらは、教育機関としては当然検討しておくべきものばかりです。その全学的な教育に関する部分は、これまで教務委員会で審議されたものを素材として準備します。しかし、教務委員会ではこれらの項目全てに関して6年間を見通した全学的な合意が得られ、成文化されているわけではありません。このWGで検討し、いずれは教務委員会で決めていただきます。最も重要な問題は当然のことですが大学院重点大学を選んだ本学における初年度教育です。中期計画作成までに結論は得られずとも、継続して議論する方針です。

昨年度教務委員会で方向が決められた課題として、教育課程及び教育組織の在り方検討WGの、(1)成績評価と進学制度、(2)学部共通授業、の2つの検討部会からの答申があります。前者は今年度「成績評価の基準明示と適切な成績評価の実施に関するWG」として実行に移されています。これは、中期目標・計画でも要求されている項目です。後者は、数学、物理学、化学、生物学の理系基礎科目に関するコース別履修案です。理系各学部の専門教育はこれらの科目を基盤にして構築されています。この答申は未来戦略検討WG答申の“基本的な考え方”に沿っています。多様化した理系の入学生に対して、中等教育での履修科目と、将来の志望に併せたコース別カリキュラムを提供しようという案です。今回設置されたWGの理系作業部会で実現化を諮りたいと思います。昨年度のWGでは、文系の共通授業は必要ないという意見が強かったので、当面の議論を見送りました。

## &lt;討論：成績評価をめぐって（その2）&gt;

“厳格な成績評価”と全学教育科目「化学」の  
成績評価の問題点

理学研究科 井川 駿一

全学教育基礎科目の「化学I」（1年1学期）、「化学II」（1年2学期）、「化学III」（2年1学期）は、それぞれ24クラス、24クラス、9クラスで並行して開講されている。対象は理医系（理医歯薬工農獣水）学部の学生である。2003年度からのシラバス改訂に当たり、「化学」の科目責任者として、今年度の授業担当教官の協力を得て最近の各クラスの成績分布を調査した。加えて、多くの教官から成績評価に関する意見、学生の勉学意欲を引き出し持続させるための工夫や苦心も寄せられている。未だ集約するには至っていないが、それらの結果と意見を踏まえたうえでの私見を以下に述べる。

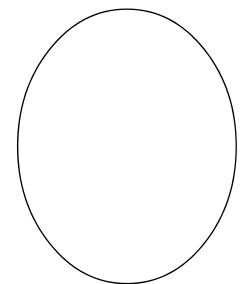
上記3つの科目ともに、クラスごとの成績分布は大きく異なっている。例えば、優の割合が13%～78%の間で分散している。シラバスが同じ（あるいはほぼ同じ）であるにも関わらずである。しかし、多くの（全ての）教官が真摯に教育の理念にまで考えを巡らせながら決定したものであり、その意味では、各教官の“厳格な成績評価”の結果といえることができる。

一方、学生が、同一のシラバスに従って実施される科目の成績分布がクラスによって大きく異なることに、強い不公平感を持つことも当然である。それを緩和するために相対評価によって成績分布を統一させるべきであるとの主張はそれ相応の説得力を持つ。しかし、その主張を突き詰めた先に画一化された授業と成績評価が見えるが故に、多くの教官が違和感を持つのではないだろうか。それは、学生の選別や管理のうえでは最も効率的な方法であっても、

教育とは無縁のものである。各教官の“厳格な成績評価”を相対化して画一化することにより、教官の教育に対する熱意と真摯な努力を削ぎ落としてしまう危険性を孕む。勿論、決して

このような極端な画一化の主張がなされているわけではない。ここでは、回避すべき極限として想定したままである。

他方の対極として考えられることは、各教官がそれぞれの理念に基づいた“厳格な成績評価”を貫くことである。各クラスの授業は担当教官と学生の相互作用によって進められる。教官は普通の授業において、またレポート、小テスト、中間テストなどを通じて、学生の理解度を把握すると共に履修の到達目標を示す。それを指針として学生が勉学した結果を定期試験で判断し、レポート、中間テストの成績、出席状況などを加味して成績評価を行うのが一般的であろう。クラスの全学生が非常に良く努力した結果として全員優とする可能性、あるいは、習得があまりに不十分で全員不可の可能性をも排除しない。そこでは、学生の勉学意欲を持続させる、あるいは奮起を促す、更には北大の学生の習熟度を一定水準に維持するという配慮も働くであろう。これは、「化学」という一科目の教育に限ってみれば理想的状況であるかもしれない。同一のシラバスという制約はあるものの、現在の北大の全学教育科目「化学」の成績評価はこれに近い状態にあるように



思われる。しかし、クラス間で大きな成績分布の違いが生じ、学生に強い不公平感を与えてしまっているのも現実である。

北大では成績によって学生の進級学科が決定され、更には将来の方向まで左右されかねない。そのため成績評価の公平さが求められる。特に考慮すべきは、同じ系の学生の複数のクラス（例えば理学部の化学系では2クラス、工学部の社会工学系では3クラスなど）で「化学」の授業が並行して行われている場合である。同系内のクラス間で学生の潜在力が大きく異なるとは考えにくい。にもかかわらず、成績分布が大きく異なってしまうとすれば学生に対する不公平さは強まる一方である。これを緩和するには、評価に相対性を導入せざるを得ない。同系クラスの授業担当者間で、少なくとも学期末には成績分布に

ついでにの摺り合わせを行い、おおまかな合意を造る必要がある。既に、このような摺り合わせが一部の系では行われているが、これを他の系でも行うべきであろう。しかし、擦り合わせの範囲は同系内に止め、「化学」の全クラスで統一する必要は無いと考える。系によって化学に対する学生の“志向”が異なり、また必修か選択かの違いもある。従って、系の異なるクラス間で成績分布が異なってもなんら不自然ではない。この差異を相対評価によって均すことにどれほどの意味があるのだろうか。むしろ、“厳格な成績評価”とは相容れないものとなる。極端に大きな差異が生じた場合にはなんらかの対処が必要ではあるだろう。

(全学教育科目「化学」科目責任者)

## 厳密な成績評価は誰のために 何のために

文学研究科 櫻井 義秀

「厳格な成績評価」の企画は興味深いものでした。教養科目主体の文学研究科の授業と基礎系科目を重視する理系の授業が対立しているととれなくもありません。しかし、これは学問の性質による対立ではないでしょう。どの科目の先生方も受講生の数による授業実施の方法と、教科科目の教育目標の違いを適当に案配して、評価されていると思われる。

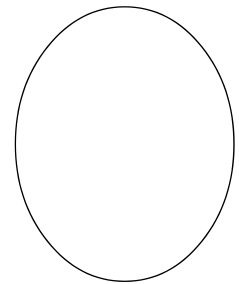
私の社会学の授業は例年200名を超える履修者（出席者は半分）ですが、レポートによる評価であっても、評点はまさしく可に偏りながらも正規分布になります。相対評価の感覚が働くのでしょうか。他方、20名弱の論文指導講義では受講生の作業量が多いので大半が優と良です。絶対評価を意識しているかもしれません。これは授業の方法によるものです。

教科科目の性質からいうと、社会学の場合、基礎的知識の習得を厳密に評価するというにあまり意味はありません。一つは社会学にテキストが存在

しないことがあります。学派の思想と知識体系、社会的知見というものはありませんが、全ての社会現象を理解する強い理論がないのです。理論や概念の説明力が自然科学とは根本的に異

なり、社会体制や歴史的状況の中にこそ妥当性が担保されているからです。西欧近代社会の議論を参照することは重要ですが、それで日本社会が分かるわけではありません。その意味で、大方の社会学の学説、理論書は「参考」書です。

もう一つは、「社会の認識」という科目は、現代社会を自分なりにどう捉えるのか、考える機会を学生に提供するのが主目的であろうと思われる。従って、その授業にふれてその人なりに啓発されるところがあればそれでよく、努力の程度、思考のさ



えを評価し、学生の数が増えれば、併せて全体の中での位置をその学生に教えてあげることが、私の場合、評価のおおよそのめやすになっています。

ところで、前回の論争(?)を読みながら、先生方の議論に「何のために、誰のために、厳密な評価をするのか」が必ずしも明示されていなかったように感じました。それが明確化されれば、授業規模や教科の性質の違いをうめる手段はさらに考えられるでしょう。

学生の向学心を鼓舞するのであれば、それは学生の評価以上に、教員の指導能力が厳密に評価されるべきです。全学教育の成績によって専攻の配属が決まる学部があるのであれば、それは学生のために同じ教科間の評価基準を厳密に定める必要があります。

卒業学生の質を保証するシステムとして厳密な評価がなされるべきという総論的な議論には、私は半分同意し、半分首を傾げます。安易な学生と大学卒能力のない学生を卒業させないという大学の決意としては意味があります。しかし、卒業生の質の保証というのは誰に対して、どのようになされるという見込みがあつてのことなのか。日本のように大衆化

した高等教育段階においては、教育機関ではなく、一般社会が評価の基準をもっています。日本には七百数十の大学・短大がありますが、一部の社会的威信の高い大学を除き、学生は「大学卒」というカテゴリーで認識されるに過ぎません。従来企業社会は採用の手間を省くために、学生のポテンシャルを大学の社会的評価で代替してきましたが、昨今は「大学名」を考慮しないで個人の能力評価を行うところが増えてきました。今、学生の総単位取得数とその平均得点を出したところで、誰がそれを人材選考の基準に使うでしょうか。もちろん、大学は大学院受験生の選考と卒業証書を受け取る学生総代選考に使えます。

「成績の厳密な評価」は、具体的な目標との対応で適宜なされるべきで、全学教育の理念や教育方法と理解されるべきものではないと思われます。学生の問題関心を喚起し、学習能力を高める方策は、評価方法よりも、1コマの授業にどれだけ教員が集中し、授業時間外にも学生との対応にどれだけ時間が割けるかだと、殆どの先生方は考えているはずです。

# センター CENTER

## 日米シンポジウム 高校と大学の接続・連携の多様な可能性を探る

日本の大学入試は、大学による「一方的な選抜」から受験生との「相互選択」を重視する時代を迎え、高大連携の試みが急速に広がっています。大学教員が高校に出向いて、大学紹介や講演会を行う単発の“出前授業”から、高校生が大学のキャンパスに通い正規の授業や特別講義を受講するなど、一定の学習目標をもったプログラムへの受入れが始まっています。道内においても様々な高大連携活動が展開されています。高等教育機能開発総合センターは高大連携の歴史の長い米国からパネリストを迎え、北海道教育委員会と共同で、日本とアメリカの実践例を通して高校教育と大学教育の連携・接続の多様な可能性を探るシンポジウムを開催することになりました。シンポジウム終了後、パネラーと参加者との交流会も予定されています。お忙しい時期ですが、動き出した日本の高大連携の将来についてごいっしょに考えてみませんか。ぜひ、多数ご参加下さい。

日時：2003年2月3日（月） 13時～17時

場所：北海道大学情報教育館3階スタジオ型中講義室

参加費：無料、通訳つき

共同開催：北海道大学高等教育機能開発総合センター  
北海道教育委員会

シンポジウム：

1. 課題提案
2. アメリカの高校 大学の連携・接続の現在と将来

- 1) 到達度評価に基づく新しい入試制度の展開  
オレゴン州のPASSと全米大学協会のStandards for Success  
デイビッド・コンリー  
(オレゴン大学・教授)
- 2) 高等学校で履修できる大学初年次教育プログラム  
二つのモデル—Project AdvanceとAdvanced Placement Program  
ジェラルド・エドモンズ  
(シラキュース大学・準教授)  
ジョン・フィセット  
(シラキュース大学、プロジェクト・アドバンス)
3. 日本の高校改革と高大連携への期待  
北海道における高大連携の実践事例から  
(数例について高校と大学の関係者による報告を予定しています)
4. 総括討論  
\* 交流会：午後5時半から  
情報教育館4階多目的共用教室(1)

問い合わせ先および申込先

北海道大学高等教育機能開発総合センター

生涯学習計画研究部(町井)

入学者選抜企画研究部(山岸)

Tel: 011-706-7512 Fax: 011-706-6069

E-mail: shogai@high.hokudai.ac.jp

# 全学教育

## GENERAL EDUCATION

表1 2003(平成15)年度全学教育部行事予定表

	【日(曜日)】	【行事】	【備考】
4月	4(金)	クラス担任代表会議【予定】	
	7(月)	新入生オリエンテーション	
	8(火)	入学式	
	9(水)	学部ガイダンス	
	10(木)	第1学期授業開始	
	18(金), 21(月)	1年次履修届受付 2年次以上履修届受付	当該学部
	21(月)	追加認定試験成績締切	
5月	上旬 ~ 下旬	定期健康診断	
6月	5(木)	開学記念行事日	休講
	5(木) ~ 8(日)	大学祭	休講
7月	23(水) ~ 25(金)	補講日	
	28(月)	第1学期授業終了	
	29(火) ~ 8月8(金)	定期試験	
8月	11(月) ~ 13(水)	追試験	
	11(月) ~ 9月30(火)	夏季休業日	
	26(火) 正午	定期試験及び追試験成績提出締切	
9月	中旬 ~ 下旬	進級判定及び学科等分属手続	当該学部
	24(水) ~ 26(金)	集中講義期間	
10月	1(水)	第2学期授業開始	
	9(木) ~ 10(金)	1年次履修届受付 2年次以上履修届受付	当該学部
	10(金)	追加認定試験成績締切	
11月			
12月		【24(水)に月曜日の授業を実施】	
	25(木) ~ 1月7(水)	冬季休業日	
1月	8(木)	授業再開	
		【8(木)に月曜日の授業を実施】	
	17(土) ~ 18(日)	大学入試センター試験【16(金)休講】	
	28(水) ~ 30(金)	補講日	
2月	2(月)	第2学期授業終了	
	3(火) ~ 16(月)	定期試験	
	19(木) 正午	定期試験成績提出締切	
	17(火) ~ 19(木)	追試験	
	20(金) 正午	追試験成績提出締切	
	25(水)	北海道大学第2次試験(前期日程)【予定】	
3月	12(金)	北海道大学第2次試験(後期日程)【予定】	
	中旬 ~ 下旬	学科等分属手続	当該学部

## 高等教育

## HIGHER EDUCATION

# 全学教育ワークショップ「適切な成績評価について」

第5回北海道大学教育ワークショップ(FD)が、11月8日、9日の両日、「適切な成績評価について」をテーマに、奈井江温泉ホテル北の湯で行われました。本学から32名、弘前大学、帯広畜産大学から5名が参加し、世話役10名、総長を加え総勢48名で実施されました。今回のワークショップでは、午後5時20分から総長の講演があり、その後も夕食をとりながら総長を囲む懇談会を開催し、夜遅くまで教育に関する論議にわきました。

ワークショップは以下のようなプログラムで2日間にわたって研修が行われました。

### 1日目

アイス・ブレイキングの理論と実際

ミニレクチャー「大学教育改革とファカルティ・デベロップメント」

グループ作業Ⅰ「成績評価の問題点」

ミニレクチャー「学習目標」

グループ作業Ⅱ「シラバスの目標の検討 全学教育科目を例として」

ミニレクチャー「評価1」

グループ作業Ⅲ「レポートの評価」

中村睦男総長の講演「北大をめぐる環境の変化と教育政策」

夕食と総長を囲む懇談会

### 2日目

グループ作業Ⅲの発表と討論(60分)

ミニレクチャー「評価2」(20分)

グループ作業Ⅳ「成績評価のガイドラインづくり」(60分)

インタラクティブな授業の実例(60分)

参加者の個人的感想や意見(60分)

本年度のもう一つの特徴は、「アイスブレイキング」の研修に外部の講師をお招きしたことです。講師の寄田勝彦氏は、乗馬や自然観察を用いて子供たちの教育や町づくりを行うNPO組織に所属し、初対面の人達を仲良くさせる技術の一端を教えてくださいました。また、最後に実際に行われている学生参加型授業を紹介しました。これも、反響が大きかったようです。

今回の研修のポストアンケートでも、多くの方がワークショップの重要性を認識しておられることがわかりました。また、「対象を若い教官に絞ってはどうか」とか、「このテーマについての議論をするには時間が少なすぎた」など貴重なご意見もいただきました。来年度のワークショップはこれらのご意見を生かした内容に変えていく予定です。



## 2月に「インターンシップセミナー2003」

インターンシップに関する理解と関心を高め、北海道地域におけるインターンシップの導入促進を図るため、大学、学生、企業を対象とした「インターンシップセミナー2003」（仮称）を開催いたします。

大学生の職業意識の育成や学習意欲の喚起を図るための一つの方策として、インターンシップが我が国においても急速に広まっています。北海道においても、将来を担う人材育成を図るという観点から産学官が一体となって積極的に取り組んでいます。特に、2002年4月には道内大学等からなる「北海道地域インターンシップ推進協議会」（事務局：北大内）を発足させ、道内の大学が一体となって、産業界、行政とも連携をとりながらインターンシップの拡充に努めています。

今回のセミナーは、同協議内の事業の一環として、一層のインターンシップの普及促進を図るために実施するものです。多数の学生、教職員、企業の方々の参加をお待ちしています。

日時：2003年2月28日（金）13：30～17：00

場所：センチュリーロイヤルホテル20階「白鳥の間」

主催：北海道地域インターンシップ推進協議会、北海道経済産業局、(財)北海道地域総合振興機構（はまなす財団）

参加費：無料

内容：

1．開会・挨拶

2．基調講演

「インターンシップの目的と意義」

田中 宣秀 氏

（名古屋大学大学院教育発達科学研究科教授）

3．事例発表

(1)企業 2社

(2)学生 2名

(3)過去経験者 1名

4．分科会

(1)企業向け：「インターンシップ導入のすすめ」菊池将人氏（吉川運輸(株)総務部主幹）

(2)大学・学生向け：「インターンシップ参加の心得」山本純氏（札幌学院大学商学部助教授）

（タイトルおよび内容は都合により変更される場合があります）

問合せ先

高等教育機能開発総合センター生涯学習計画研究部助教授 亀野 淳

tel&fax：011-706-6928

e-mail：jkameno@high.hokudai.ac.jp

## 生涯学習フォーラム 「工学部卒業生調査から見た大学教育の課題とキャリア形成 における継続教育のあり方について」

第4回生涯学習フォーラムが北海道工学教育協会との共催で12月19日工学研究科会議室において実施されました。

今回のテーマは、「工学部卒業生調査から見た大学教育の課題とキャリア形成における継続教育のあり方について」でした。現在本学においても全学教育及び専門教育の改革が進められていますが、改革を進めるにあたっては、卒業後の職業生活の視点から専門教育及び全学教育のあり方についても検討する必要があります。また急速に展開する科学技術に対して、卒業生の継続教育に大学教育がどのように答えるかも、生涯学習時代の大学の課題でもあります。

今回のフォーラムでは、生涯学習計画研究部が平成11年から12年にかけて実施された北大工学部卒業生調査（約6500人を対象に2200人からアンケートを回収）とその後現在まで継続された卒業生へのヒヤリング調査をもとに、上記課題について調査と分析を担当してきた国立教育政策研究所の笹井宏益氏の報告を行いました。北海道工学教育協会の会員をはじめ、本学の教職員・院生約50名が参加し、卒業生からの本学教育への厳しい意見を噛みしめながら熱心に討議が行われました。尚、この調査の資料を御希望の方は、生涯学習計画研究部までお問い合わせ下さい。

### 入学者選抜

#### ADMISSION SYSTEMS

## 道外（奈良）で初の北大セミナー

平成15年2月11日（祝）に、道外では初めての北大セミナーを開催します。アドミッションセンターと奈良県高等学校進路指導連絡会（奈良県下の全56校が参加）との共催です。北海道および北海道大学な

らではの研究や教育をインタラクティブに紹介します。参加者は、高校生と保護者で約300名を見込んでいます。一般市民にも開放する予定です。講師と講演テーマは以下の通りです。

表3 Be ambitious！北海道大学の人と学問

講演テーマ	講演者	内容
北海道大学の未来	加茂 直樹（入選企・教授）	北海道大学が目指す未来を示します。
北大への招待	池田 文人（入選企・助教授）	北海道大学126年の歴史を映像を交えて紹介します。
蛙学への招待	鈴木 誠（入選企・助教授）	カエルを通して自然界・人間界を眺めます。
薬の科学	加茂 直樹（薬・教授）	昨今話題になる薬と生命の諸問題について考えます。
水は大地をめぐる	井上 京（農・助教授）	水文学を通して地域の環境や農業を考えます。
サメのおちんちは二つ	仲谷 一宏（水・教授）	軟骨魚類の仲間であるサメ類について考える。
火山噴火と災害	宇井 忠英（理・教授）	北大が取り組む火山研究とその社会還元とを紹介する。

入選企 = 入学者選抜企画研究部の略

## 札幌南高で大学院生による北大説明会

昨年12月4日(水)に、札幌南高等学校において「大学とは、大学院とは」というテーマで大学院生による説明会が行われました。この説明会は、北大の情報を教官だけでなく、高校生と年齢が近い大学院生から自身の研究活動について、その内容や醍醐味、また研究面での苦しさや学生生活全般について語ってもらおうというものです。

今年は、北大を希望する高校1・2年生合わせて400名と、その保護者150名、計550名という昨年の2

倍の参加がありました。

説明会は、まず北大の全学教育の特徴について、教官から60分の全体講演がありました。その後、高校生がそれぞれ希望する研究科に分かれて、所属する2名の大学院生から30分ずつ話を聞き、その後質疑応答と進行において、まだ改善すべき点が散見されましたが、大変好評でした。北大の新しい情報提供の仕組みとして、定着させたいと考えています。

表2 協力してくれた大学院生一覧

研究科	専攻	課程	学年	氏名
文学研究科	歴史地域文化学	博士後期	3年	佐藤 猛
	思想文化学	"	"	守口 真衣
法学研究科	公法	"	"	寺林 智栄
	"	"	"	谷口 正弘
理学研究科	物理学	"	1年	金森 逸作
	地球惑星科学	博士前期(修士)	2年	中神 雄一
医学研究科	癌医学	博士課程	1年	藤井 健吉
	病態制御学	"	2年	中村 裕之
薬学研究科	医療薬学	博士後期	1年	鶴間 一寛
	"	博士前期(修士)	2年	松村 慶子
工学研究科	都市環境工学	博士後期	1年	武田 清香
	量子エネルギー工学	博士前期(修士)	"	森島 正輝
農学研究科	環境資源学	"	2年	福井 晶子
	生物資源生産学	"	"	片倉 友義

写真：札幌南高における説明会の分科会の様子

## AO入試合格者決定

本学の第3回目のAO入試が実施され、12月9日（月）に合格者が発表されました。2003年度入試から新たに理学部生物科学科が加わり、8学部（理学部は3学科）でAO入試が行われました。合計98名の募集人員に対して、全国41都道府県と在外教育施設

から314名の出願があり、最終的に87名が合格しました。入学者選抜企画研究部は、これから70余校の高校訪問を行い、北大AO入試に対する聞き取り調査を行う予定です。

表4 2003年度AO入試合格者

学部・学科	募集人数	志願者数	倍率	第1次選考			第2次選考			
				選考対象者数	合格者数	不合格者数	受験者数	合格者数	不合格者数	
教育学部	2	9	4.5	9	9	0	9	2	7	
経済学部	10	55	5.5	55	30	25	30	10	20	
理学部	地球科学科	5	15	3.0	15	15	0	15	5	10
	化学科	10	22	2.2	22	18	4	18	10	8
	生物科学科	5	35	7.0	35	14	21	14	6	8
歯学部	10	24	2.4	24	20	4	20	10	10	
薬学部	15	80	5.3	80	48	32	48	10	38	
工学部 材料・化学系	17	20	1.2	20	19	1	19	10	9	
農学部 農業工学科	8	13	1.6	13	9	4	8	8	0	
水産学部	16	41	2.6	41	27	14	27	16	11	
合計	98	314	3.2	314	209	105	208	87	121	

# センター日誌

CENTER EVENTS, Oct.- Nov.

## 10月

- 4日 ・ (訪問) 静岡県浜松日体高校来学  
・ (訪問) 岡山県玉野高校来学
- 5日 ・ (行事) 北大キャンパスツアー (実験ツアー  
1: 広島県西城紫水高校)
- 8日 ・ (行事) 札幌西高校「大学研究プロジェクト」
- 9日 ・ (訪問) 札幌手稲高校来学
- 11日 ・ (研究会) 第14回大学解放の在り方に関する研究会
- 12日 ・ (協議会) 第8回生涯学習実務者協議会
- 15日 ・ (会議) 第76回センター教官会議
- 16~23日 ・ AO入試出願受付
- 16日 ・ (訪問) 長野県長野高校来学
- 17日 ・ (講演会) カリフォルニア大学パークレー校  
シェルダン・ロスブラット博士講演  
会「学士課程教育のカリキュラム構  
造に関する英米比較」
- 18日 ・ (訪問) 静岡県下田北高校来学
- 22日 ・ (会議) 第95回全学教育委員会小委員会
- 24~25日 ・ (研究会) 第24回全国国立大学生涯学習系  
センター研究協議会
- 29日 ・ (行事) 北大キャンパスツアー (実験ツアー  
2: 札幌北陵高校)  
・ (研究会) 地域連携教育のあり方に関する研  
究会
- 30日 ・ (訪問) 札幌丘珠高校来学

- 31日 ・ センターニュース第44号発行  
・ (研究会) 第3回生涯学習フォーラム

## 11月

- 5日 ・ (会議) 第24回生涯学習計画研究委員会
- 6日 ・ (訪問) 南幌中学校来学
- 7日 ・ (訪問) 札幌啓明中学校来学
- 8日 ・ AO入試第1次選考結果発表
- 8~9日 ・ (行事) 第5回北海道大学教育ワーク  
ショップ
- 12日 ・ (会議) 第96回全学教育委員会小委員会  
・ (会議) 第77回センター教官会議
- 13日 ・ (訪問) 札幌開成高校来学  
・ (行事) AO入試懇談会
- 15日 ・ (訪問) 野幌中学校来学
- 20日 ・ (会議) 第42回全学教育委員会
- 21日 ・ (会議) 第26回教務委員会幹事会
- 22日 ・ (会議) 第9回教務委員会大学院共通授業  
実施WG
- 24日 ・ AO入試第2次選考日
- 26日 ・ (会議) 第97回全学教育委員会小委員会
- 28日 ・ (会議) 第22回教務委員会
- 29日 ・ (会議) 第6回教務委員会成績評価等検討  
WG

# 行事予定

SCHEDULE, December - April

	【日(曜日)】	【行事】	【備考】
12月		【24(火)に月曜日の授業を実施】	
	25(水) ~ 1月8(水)	冬季休業日	
1月	9(木) ~ 10(金)	補講日	
	14(火)	授業再開	
	18(土) ~ 19(日)	大学入試センター試験【17(金)休講】	
2月	3(月)	第2学期授業終了	
	4(火) ~ 17(月)	定期試験	
	19(水) 正午	定期試験成績提出締切	
	18(火) ~ 20(木)	追試験	
	21(金) 正午	追試験成績提出締切	
	25(火)	北海道大学第2次試験(前期日程)【予定】	
3月	12(水)	北海道大学第2次試験(後期日程)【予定】	
	中旬 ~ 下旬	学科等分属手続	当該学部
4月	10(木)	第1学期授業開始	

## センターニュース 2002, No. 45 目次

<p>巻頭言 ..... 徳永 正 ..... 1</p> <p>討論：成績評価をめぐって（その2） ..... 3</p> <p>    “厳格な成績評価”と全学教育科目「化学」の     成績評価の問題点 ..... 井川 駿一 ..... 3</p> <p>    厳密な成績評価は誰のために何のために     ..... 櫻井 義秀 ..... 4</p> <p>日米シンポジウム     高校と大学の接続・     連携の多様な可能性を探る ..... 6</p> <p>2003（平成15）年度     全学教育部行事予定表 ..... 7</p> <p>全学教育ワークショップ     「適切な成績評価について」 ..... 8</p>	<p>2月に「インターンシップセミナー2003」 .. 9</p> <p>生涯学習フォーラム     「工学部卒業生調査から見た大学教育の課題     とキャリア形成における継続教育のあり方     について」 ..... 10</p> <p>道外（奈良）で初の北大セミナー ..... 10</p> <p>札幌南高で大学院生による北大説明会 ..... 11</p> <p>AO入試合格者決定 ..... 12</p> <p>センター日誌・行事予定 ..... 13</p> <p>目次・編集後記 ..... 14</p>
---	--

### 編集後記

前号で紹介したHuWebは、現在10教科以上で試験的に使用されています。たしかに、ある程度の技術力があれば、担当教科のホームページも掲示板もメイリングリストも自分で管理しているサーバーに設置することができます。HuWebの利点は1台のサーバーが数十科目の教科を同時に管理できることにあります。この3ヶ月間に利用者の方々のご意見やコメントをもとに改良が重ねられ、かなり使いやすいものになってきました。

他大学の方からも興味を示していただいております。今後このようなe-Learningソフトが、日本でも急速に普及する可能性を感じています。（オ）

### センターニュース 第45号

（北海道大学高等教育機能開発総合センター広報誌）

発行日：2002年12月31日

発行元：北海道大学高等教育機能開発総合センター

〒060-0817 札幌市北区北17条西8丁目

電話 (011)716-2111 ・ FAX (011)706-7854

編集委員：小笠原正明・西森敏之・細川敏幸・

町井輝久・安藤厚・山岸みどり・鈴木誠・

池田文人・亀野淳

ご意見、お問い合わせは 印の編集委員まで

電話：(011)706-7514; FAX (011)706-7521

インターネットホームページ：http://infomain.academic.hokudai.ac.jp/center